

媒体と状況

森 元孝 (早稲田大学文化構想学部)
wienmoto@waseda.jp

0. 問題

本稿の主題は、理論社会学の基本用具整備の一部である。

目次

- 1. 社会への注意 — 本当の社会
- 2. 社会体系の主題化
- 3. 体系と媒体
- 4. 媒体の種類

1. 社会への注意 — 本当の社会

1) 基本操作

ある社会の内容をsociétéとしよう。指し示しの算法に従うと、こうした社会への注意は、次のような区別として示される。すなわち、あるわかった「社会」への注意(Attention à la société)¹は、次のように鉤印で封じ込められる。

$$\overline{\text{société}}$$

しかしながら、封じ込めると、その瞬間から、実はその外側も問題となる。鉤印は、その内側と外側とがあることを教えてくれる。

したがって、鉤印が、「社会」ということの全体を記している。しかし今一度、この全体なる内容を同じように問うことも可能であろう。

すなわち反省（再帰）であるが、それは次のように記されよう。

$$\overline{\overline{\text{société}}} = \text{société}$$

反省してその内容を問うとは、最初のそもそもの区別の**取消**ということ

¹多田光宏「社会的世界の時間構成 — 社会学的現象学としての社会システム理論」早稲田大学文学研究科提出博士学位論文(2011年度)における「社会の発見」から着想を得ている。

でもある。sociétéとは何かということである。

これとは違って、同じ区別を重ねること、すなわち注意し、また注意することは、繰り返しである。この繰り返しは、**圧縮**される。

$$\overline{\text{société}} \quad \overline{\text{société}} = \overline{\text{société}}$$

したがって、次のようなこともありえよう。

$$\overline{\text{société}} \quad \overline{\text{société}} \quad \overline{\text{société}} = \overline{\text{société}} \quad \overline{\text{société}}$$

最終的にひとつに圧縮される。すなわち、sociétéとは、société だということである。

さて、これらの関係を理解すると、次のように、これらとは逆を考えてみるができる。これは、たいへん面白い。すなわち、**誇張**というものである。

社会について、われわれはいろいろに社会を言ってみることができる。「社会」を声高の論じる人が、いつも騒がしいのは、こういう形をしているゆえである（誇張1）。

$$\text{société} = \overline{\overline{\text{société}}} \quad \overline{\overline{\text{société}}}$$

さらに誇張すると、

$$\text{société} = \overline{\overline{\overline{\text{société}}}} \quad \overline{\overline{\overline{\text{société}}}} \quad \overline{\overline{\overline{\text{société}}}}$$

(誇張2) ということになり、さらに次も同様である（誇張3）。

$$\text{société} = \overline{\overline{\overline{\overline{\overline{\text{société}}}}}} \quad \overline{\overline{\overline{\overline{\overline{\text{société}}}}}} \quad \overline{\overline{\overline{\overline{\overline{\text{société}}}}}} \quad \overline{\overline{\overline{\overline{\overline{\text{société}}}}}}$$

まとめると、「社会」への注意は、圧縮され、かつ誇張されるということであろう。

2) 区別の区別

鉤印は、鉤の内側と外側の区別だが、気をつけねばならないのは、この記号は、まさしくそうした区別ということ、そのことへの注意だけを記しているということである。

「société」が、「本当の社会」だとすると、その内容は、鉤印の囲われ表象して見えるものである。反省するとその内容が見えるようであるが、実は当初の表象、注意そのものの取消ということでもある。

さて、ここで気づくのは、この鉤印は、何をどのように記しているのかということである。「本当の社会」という表象は、「本当の社会」とそうではない社会との区別の上にあるが、それはどんな区別であろうか。

単純化すると、「本当の」と「そうではない」という区別は、「本当の」区別か、そうではないのかという問いである。これはよく紹介されるように嘘つきパラドクスにはほかならない。

すなわち、私「森元孝」は、本日、今ここで本当のことしか報告していない、と言う。その私は、森元孝である。この森元孝が、「本当か」「そうでないか」は問わない。最初の問いと、問うが帰属する点とは違う水準にあるということであろう（水準異同）。

鉤印は、そうであり、かつそうでないという、全体を示していたが、同時にこの鉤印は、区別の全体を見ている観察者そのものに帰属する。したがって、「本当の社会」と「そうではない社会」との区別を行い同時にその両方を観察者はとらえているということになる。

このとき、「本当の」と「そうでない」の区別、この観察者自身に適用することは前提にない。

しかしながら、この点について問い返されるなら、「その観察者は、客観的だから」「その観察者は、価値中立的だから」「その観察者は、社会学者だから」「その観察者は、社会調査士資格保持者だから」などの根拠提示が必要となる。

無論、この種の根拠提示は、権威主義で断ち切るか、無限背進をしていくことになり泥沼に陥るかどちらかになる。現在の「社会」では、たいていは後者に陥る。

「本当の社会」→『『本当の』は本当か』→「客観的調査だから」→「社会調査士だから」→・・・などである。

ただし、「社会」を注意の対象としているとなると、NaClのような場合とは異なり、この対象の中に、これを観察する観察者自身も含まれている。

区別した内側に、観察者、すなわち鉤印そのものを、内側の内容に算入させることになる。このことは、先に触れたとおり、「A=A」という同語反復（トートロジー）と、「A≠A」という逆説（パラドクス）とが、ひとまとまりになった形式の延長にあるものである。

ゆえに、森 元孝の著作は本当のことが書いてある」というのは、本当のことなのである。なぜなら、私は、森元孝であり、社会学者であり、博士号もあり、かの早稲田大学の教授でもあり、専門社会調査士だからである（閉鎖）。

区別と表象1

本当の社会	それ以外
-------	------

記号の閉鎖²

本当の社会	それ以外
-------	------

区別と表象2

社会学者	それ以外
------	------

記号の閉鎖²

社会学者	それ以外
------	------

本当の社会の根拠づけ（再算入）

本当の社会	それ以外	社会学者	それ以外
-------	------	------	------

²George Spencer-Brown, *Laws of Form*, Cognizer Co./Ashland, Ohio (1969)1994., p.65.

社会とは、すなわち本当の社会とは、それへの注意の圧縮と誇張であり、かつその注意の帰属先の区別、それへの注意の圧縮と誇張ということであろう。

2. 社会体系の主題化

本当の社会を問うのに換えて、その表象の区別をして社会科学者は立ち回る。

社会体系は、経済体系、政治体系、法体系、家族体系などと関係しているなどと言う。これらはどれも、ある出来事として区別され、すなわち注意された出来事が、また区別されるが同種の出来事と連関してくことで成っている。

経済体系も同様である。これが他の社会諸体系における諸出来事と区別されるのは、その表徴として、諸々の出来事を連関させる媒体が、**貨幣およびその派生体**だということである。

しばしば「市場経済」「計画経済」という言葉が使われる。市場が経済とは異なることをよく言い得ている。「市場」は、体系ではないということである。「市場」とは、経済システム内にある環境である³。経済体系は、この特異な環境を観察する。「価格」という数値指標でのみそれは可能だということである。したがって、「価格」を経済体系が制御することなどはできない。可能なのは観察だけである。

「価格体系」「料金体系」は編成することができるが、「経済体系」そのものを編成することはできない。編成をしようとするなら、別の体系から干渉せねばならない。その内容は、政治決定と言われる。

政治体系を可能にする媒体は、**権力**である。これは経済体系とは明らかに異なる出来事の連関体系のはずである。

経済体系にとっての市場は、政治体系にとっての「**公共性**」ということになる⁴。これは、政治体系の政治体系について自己言及ということである。したがって、公共性は、それ自体を単体で捉え、その構成要素を確定することはできない。というのも、これは政治(体系)の自己反省(あるいは自己確証)によって主題化可能でしかないからである。

政治そのものの構成要素、すなわち権力が連関させていく諸々の出来事が、

時間経過による産出と消失により新陳代謝をしていくことを思えば、そう簡単にこの反省内容を明示することはできない。観察というよりは、環境にある非政治的出来事への政治からの干渉として、公共性はあるはずである。

政治体系を次のように描いてみるができるであろう。

政治体系

政治体系が自己反省をするというのは、この内側と外側とを主題にして、再度内側、すなわち政治体系に引き入れるということである。政治体系は、媒体「権力」により、その同一性を確保することができる体系のはずである。権力の正当性を、言語コミュニケーションにより根拠づけるとというのが民主政であるが、これも実は政治体系からの干渉である。

しばしば、その反省内容は、次のように根拠づけられるとされる。上の式における鉤の右、すなわち環境を政治体系が区別するというのである。それは、よく法により根拠づけるとするとされる。

政治体系

法体系

しかしながら、政治体系が法体系により根拠づけられていると言うのがよいのか、実はその反射内容として法体系が投影されているのかは、しばしば不明でもある。このことは、次のような関係となり、さらなる反射内容をどこかに投影しなければならなくなる。

政治体系

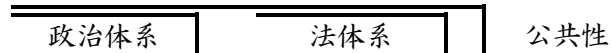
法体系

論理的には、再び政治体系に反映することもできるであろうし、法体系にもすることができるはずである。しかしながら、このことは政治家が、自らの行動(権力行使)について法に基づいていると説明し、その法は政治により決まると説明していることである。こういう関係について、世論が憤慨するということはよくあることである。

したがって、公共性は、次のように定義され、その内容が何かしばしば問われるのである。しかしながら、その問いはたいてい無に帰する。

³ Niklas Luhmann, *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag 1988, S.91 ff.

⁴ Dirk Baecker, „Oszillierende Öffentlichkeit“, in: Rudolf Maresch, *Medien und Öffentlichkeit – Positionierungen Symptome Simulationsbrüche*, Klaus Boer Verlag 1996.



すなわち、公共性とは、政治体系の（あるいは法体系とともにその）外側にあるということである。ゆえに、そもそも公共性を、政治体系や法体系から制御することなどはできない。すなわち、体系は、環境を制御することはできない。せいぜい環境に干渉、適応してみることができる程度である。

逆に公共性という、政治と法という二つの（他にも考えられるが）体系の環境から、これらの体系そのものを捕捉することができるのかどうかも不明である。

公共性は、公共性として主題化されるわけだが、そのとき政治体系でも法体系でもない体系がありえればよいのだが・・・。



「？」のところに、例えば「新聞」「放送」「学界」「企業」「王家」などを入れてみればよい。

ゆえに公共性は、他の言葉で言い換えられるだけで納得させられる。例えば「世論」「国民」「庶民の声」などである。この点では、政治家が国民の生活を第一にと言ういかがわしきと同様に、学界が国民の生活を第一にと言ういかがわしきには差はない。論理的には同根のいかがわしきに支えられている。

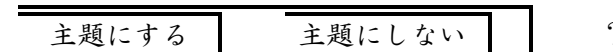
公共性は、この点では、政治体系とそれと共生関係になりうる諸体系それぞれ、およびその集まりに対して、つねに環境にあると言うことができる。

言い換えれば、公共性、世論などと呼ばれる、この環境を、鉤の左側に配置できる（諸）体系により反映させることは原理的に不可能である。しかしながら、「主題にする」は次のように記すことができるであろう。



したがって、公共の諸式は、次のようになっていく。政治が主題としな

い事柄を、サブ政治として、その主題にしないを主題にしたり、政治とは別だとされる教育が主題にする関係は、次のような関係である。

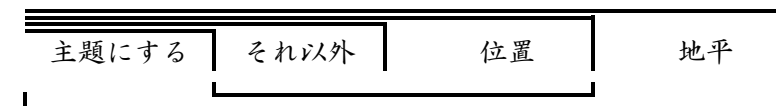


「？」について、抽象度を高めてみるとどうだろうか。それを、「意味（空間）」とも呼ぼう。

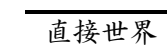
さて、空間は、次のように記すことができる。



以上を合成すると、次のようになる。これが、公共性の指し示しの算法による表現ということになるはずである。



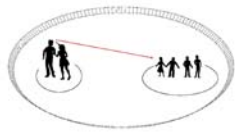
位置と地平とから成る状況は、視座と言うことであろう。言い換えると、空間の分節化は、この視座の位置に依存している。空間は、視座と同じということであろう。そこでの媒体は、差異⁵であり「意味」ということになる。すなわち、次の式が原初形であり、そのイメージは絵図のとおりである⁶。



⁵ 志向性(Intentionalität)であり、それは媒体ということであるが、ここではさらには触れない。

⁶ Alfred Schütz, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt – Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Vienna: Springer Verlag 1932. In: Alfred Schütz *Werkausgabe Band II. Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt – Eine Einleitung in die verstehende Soziologie* (M. Endreß & J. Renn, Eds.) Constance: UVK Verlagsgesellschaft 2004.

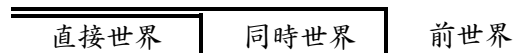
これは次の区別と絵図につながっている。



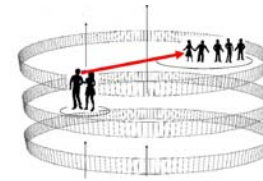
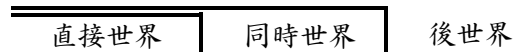
これらは、次のようにも表記できる。



さらに次のようにも表記可能であろう。



したがって、次のようにも可能なはずである。

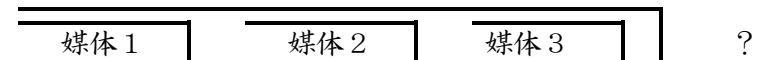


3. 体系と媒体

さて、媒体とは、出来事の個別特異な連鎖を可能にするものだとしてきた。体系は、媒体とその派生体から成っていく。この点で、体系のエントロピーは、その体系に深くかかわる媒体のそれよりも大きいと考えられる。



体系は、次のように表記されよう。



あるいは次のようにもなる。



出来事間の差異が意味であった。出来事の連鎖が、意味連関であるというのは、帰属先となる位置・地平関係がある場合である。

この際の出来事は、体験と行為の原初的区別ということのはずである。そしてこの区別が媒体の多様性を可能にする。

意味連関を可能にする媒体は、次の三種類に限られると考えている。すなわち、身体(Leib)、言語(Sprache)、人(Person)である⁷。

身体は、体験の連関を可能にする媒体である。人とは、「人間(Mensch)」

⁷ Mototaka Mori, „Person als Medium –Eine pragmatisch-phänomenologische Alternative zur Systemtheorie“, in : *Lebenswelt und Lebensform –Zum Verhältnis von Phänomenologie und Pragmatismus* (J. Renn, G. Sebald & J. Weyand, Eds.) Göttingen: Velbrück Wissenschaft 2012. Mototaka Mori, “Musical Foundation of Interaction-Music as intermediary medium”, (forthcoming).

であるとは限らない。ロボット、サイボーグ、アンドロイドは無論のこと、動物、機械、道具、図像などもでも人となり、「人でなし」も人となる。体験は、出来事を知覚することである。この出来事知覚という体験の連鎖を可能にする媒体は、身体である。これが肉体かどうかは、わからない。

言語は、音声と身体による指し示し、図示による体験連鎖の対応物である。名指しと、名指す位置との関係がある。それをとりあえず主体(Subjekt)と呼ぶが、これが人間でなければならないか、また人でなければならないかはどうでもよい。主体は、何かの知覚が帰属するそれ、何かをしている帰属先である。そうした言語主体に対して、対象物(Objekt)がある。ここでは、さらに言語行為論を展開しないが、この関係は、遂行部分と命題部分の分節化ということでもある⁸。

媒体「人」は、行為連鎖を可能にする媒体である。行為は、原初的には出来事であるが、その帰属点が身体運動であることにより、体験とは区別されるはずである。

「痛い!」「熱い!」などの発語のように、行為であるか体験であるか弁別が難しい出来事もある。これらは身体運動にも、世界にも帰属する可能性がある。

ボルツマンの H を、情報とエントロピーの関係として転用することの妥当性については、さらに問う必要があるが、情報理論の前提に従うと⁹、区別の産出、意味の連続(つながり)という時間の経過を含めた秩序性と無秩序性の値を、社会システムの H_s として想定してみることができるであろう。

H_b : 身体的秩序、 H_I : 言語的秩序、 H_p : 人格的秩序を考えるなら、これら相互の関係は定まらない。しかしながら、社会への注意は、 $(H_b < H_s) \cap (H_I < H_s) \cap (H_p < H_s)$ を前提にしているはずである。

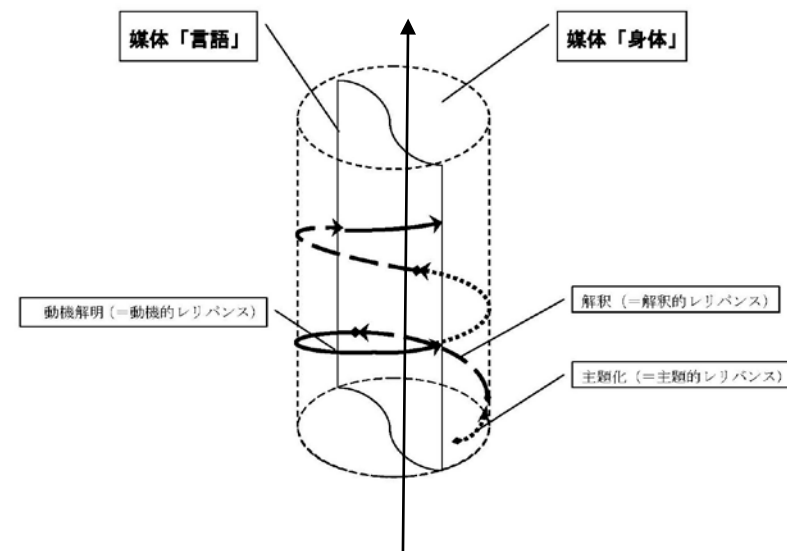
各体系 $H_s = H_{max}$ に対して各媒体のエントロピーは低いと考えることができるはずである。

言語と身体とは、時々の主観を編成する。それは時々にてあり、いつもかどうかはわからない。言い換えると、主観とは、時点時点により変化しているということであり、消えることもある。時間軸が主観の軌跡ではあ

るが、切れ目がないかどうかはわからない。

人は、こうした時々の主観の集積ということになる。矢印を時の進行としよう。身体、言語という二つの媒体は、次のような関係になっていると考えられる。

主観の析出、あるいはその存立は、この表裏一体となった媒体への注意の連鎖であり、その集積が人ということだと考えられる。



この図を上から見ると、アルフレート・シュッツのレリバンス体系の図示となる¹⁰。

4. 媒体の種類

身体、言語、人は、下図の状況媒体のそれぞれである。これらに対して、象徴媒体は、個別の主題により体系化していく特異性が必要となる水準である。貨幣と権力については、少し前述したが、これらおよびその他の象

⁸John L. Austin, *How to Do Things with Words*, Harvard University Press/Cambridge, Massachusetts 1962.

⁹ Claude E. Shannon, Warren Weaver, *The Mathematical Theory of Communication*, University of Illinois Press/Urbana and Chicago (1949)1963. Karl R. Popper, *Ausgangspunkte - Meine intellektuelle Entwicklung*, Hoffmann und Campe/Hamburg 1979.

¹⁰ Alfred Schütz, „Das Problem der Relevanz – Die als selbstverständlich hingegenommene Welt. Zu einer Phänomenologie der natürlichen Einstellung“, in: *Relevanz und Handeln 1 - Zur Phänomenologie des Alltagswissens (Alfred Schütz Werkausgabe Band VI.1)*, Konstanz 2004b, S.127.

微媒体についての説明は別の機会に譲る。

光と音は、出来事連鎖の基底にある。ゆえに基礎媒体と考えている。通信媒体は、科学技術史との関係で捉えられる物理的基底を言っている。炎、煙、水流、伝声管、銅線、電磁波、グラスファイバーなどなどである。

